

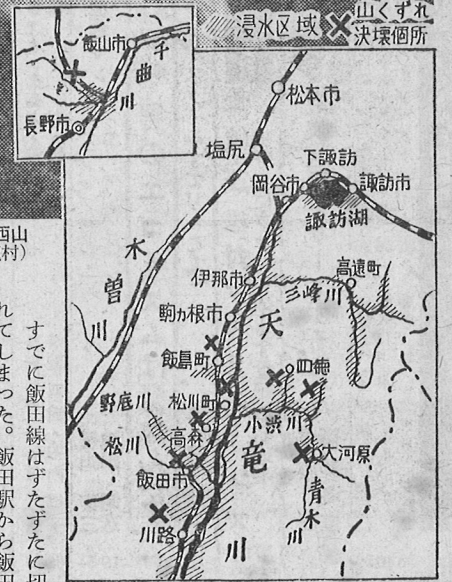
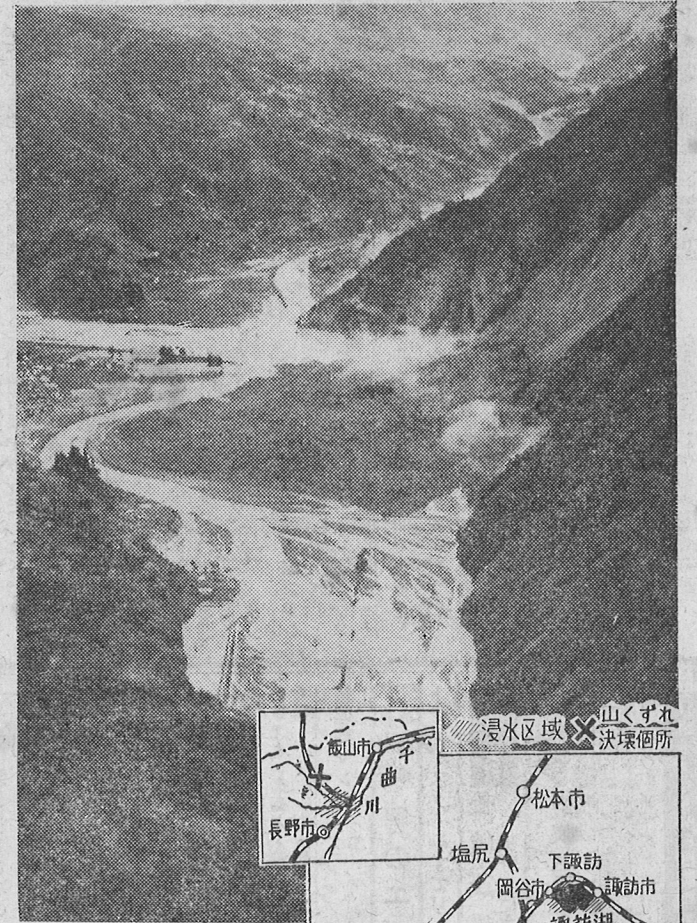


野底川の鉄砲水が運んだ流木と家屋の残骸 (飯田中央商店街)

現地へ
飛び

山崩れと濁流の死の谷を行く

集中豪雨による伊那谷水禍の根は深い



小沢川にくずれ落ちた大西山 (大鹿村)

「風か柳か勘太郎さんか、伊那は七谷糸ひく煙」——あの伊那の平和境を、一瞬のうちに埋めつくした泥魔。かつて勘太郎が投げこまれた天竜川が、怒り狂った。集中豪雨は異常な現象なので、特に観測の予算は組んでないと言っ気象庁の弱味につけこんだか、ダム建設の勝手さを嘲笑ったか、ともかく恐ろしい水害だった。いや泥害だ、官害だ、といういろいろの説もあるが、現地の声を聞くために、第一報と同時に泥の村へ入った。

道路は逆流する川に姿を崩し、山路は崩れた土にさざぎられて人も通れない。飯島から飯田市まで、孤立した部落に救援物資を送ろうと、自衛隊員は道路作りに必死の活躍である。泥で埋まった田、土の下に、見ればなくなつた家屋の残骸、天竜の濁流に浮いて走る屋根、大木——それらの上に雨がふきつける。「そっぢゃないニ、こっぢの

堤だニ！」
豪雨のなかを村の人たちが右往左往する。一カ所でも決壊すれば部落は全滅なのである。応急処置ができたばかりの道を続々とジープやバイクが追いかける。とてもそれは「道」と

は言えない。「災害救助隊」と白い布に書かれた文字が雨に濡れて車体といっしょに大きく上下に揺れる。ほとんど一台ごととに泥沼のなかに埋まって動かなくなり、それをまた隊員が押し上げる、という繰り返した。その車のあいだを縫って、飯田市の肉親を気づかう人たちが、泥まみれになって帰郷しようとして歩いている。

だが、「伊那谷」のそれはさまざまに集中豪雨になってあらわれた。それまで、森林で飽和点に達していた雨水は、せきを切ってどっと天竜とその支流に落ちこんだ。市内を流れ、天竜に注ぐ松川、野底川はたちまち氾濫した。い

わゆる山国特有の「鉄砲水」である。その恐ろしさは想像もできない。「泥水が宙を浮いて襲いかかってきただニ」傷だらけの姿で語る佐藤英三さん(66)一家も、その例に洩れない。

警報は出ていなかった

飯島から十二時間。泥と水のなかを、倒れた家屋を踏みつけ、崩れた橋を渡りながら、松川町、高森町、豊丘、喬木村を経て、ようやく飯田市にたどりつく。市内は戦場である。消防団員、町内の人たち、自衛隊員が、決壊した天竜の支流を懸命に防いでいる。飯田市は飲み水もなく、食糧も乏しく、電気もつかない、という孤立の状態だった。——たいへんなことになりましたねえ、という慰めは、「話じゃないニ」という答えでかえってくる。まったくお話にならない、いや何時間話したって、このむごさがわかってたまるか、というギリギリの言葉なのである。

二十七日の夕方、英三さんは息子の憲三さん(28)といっしょに家のそばに流れるわずかに四尺幅の川堤をかためていた。権現山のふもとにあって、野底川の支流である。だが、この泥水があふれてくれば、周囲の野菜畠はいっさいダメになってしまうのである。妻の勝代さん(31)と三人の娘さんは家のなかで夕食の用意

意をしていた。大粒の雨は耳を圧するような音になっていた。「警報」は出ていなかった。突然、どかんと音がした。「裏の工場がやられたな」憲三さんは一瞬、そう思った。裏にはコルク工場があったからである。「出るんだ、出るんだ」家のなかに叫んで、女家族が出てくると同時だった、不意

六月二十五日早朝から雨は降り続いていた。台風六号が梅雨前線を刺激し、全国各地に大雨をもたらした。

に空を飛んで山のような濁流がおどろきかき、あつと言う間もなく一家の人々は何かもわからなくなつた。水は、堤を突然越えてやって来たのである。身体は流木のあいだをまわって五十メートル流されて、ようやく止まった。長女のみさ子(23)は、気がついたとき、胸のあたりまで土砂で埋まっていた。

さいわい、英三さん夫妻と娘さん二人は無事だった。泥と流木のなかから抜け出すと高みに泳ぎついた。一瞬にして自分たちの家はなくなっていた。

「助けてくれ」
英三さんが流れている柿の木の上で叫んでいるのが見える。第二回目の水が再び襲いかかり、その柿の木は押し流された。

そのとき、異変を知った近所の人たちは、それを目にしながら、だれ一人として手を出せず、恐怖のあまり立ちすくんでいるだけだった。

英三さんはやっと家族四人がかりで助け出された。だが、一番末の正子さん(12)の姿はどこにも見えなかった。
五人になった一家はいま、市内丸山小学校の教室の片隅で傷だらけの姿で横たわっている。英三さんは胸を強く打ち、勝代

さんの顔ははれあがつている。小学校六年生の正さんはそれから三日後に三百メートルの土の下から掘り出された。医師は彼女の小さなからだにやけどのあとがある、と言ったという。

その死体のそばには工場の煙突があった。助かったみさ子さんたちは、着物はポロポロにちぎれ、半裸の姿でやっと這い出たのに、正さんの衣服はそのままだった。

いま、一家にはなにもない。薄い敷布団二枚と毛布二枚にぐるまうって、教室の片隅に横たわっている。正さんのことを話すがたに母さんの勝代さんは

おウチはどこに行ったの

家のないみじめさは特別である。豊丘村の小園は天竜の本流が破れ、一挙に部落の大半が流失した。栗沢阿智雄さんは河原になった無残なあとを鉄で掘り返しながら、
「この下にウチがあるんだ」と力なく言いながら、それでも一つ一つ瓦を掘り出していった。そのそばで、三歳になる芳彦ちゃんがタタをこねている。
「ウチはどこへ行ったと、こうして子供まで泣きます」
部落はどこどこに屋根を残すだけだ。同じ豊丘村の河野

泣いて顔を伏せる。
「でも、正子はほかの人に比べると、きれいなからだで死んだつたズラ」
みさ子さんは、お母さんを慰めるように、だれにともなくつぶやくのである。

食物はむすび二コずつとパン一コが配給されているが、これでは足りないようだ。
「家もきれいに造作したところだニ、かぼちゃんも今年はごろごろ満作だったなあ」
そして英三さんは言うのである。
「ほかに何もいらぬ。ただ住むところがほしいニ」

では、負傷した斎藤夏江さん(31)が、泥水に埋まった家の隅に横にされたままだった。
やはり、鉄砲水に巻きこまれ、流木といっしょに流されたのだ。二日間、泥水を吐き続け、額の深い傷にも泥がいつぱいつまっていた。この村には診療所となく、一人の医師が走りまわる有様だという。家族の人はすべてをあきらめた口ぶりで言う。

「飯田まで自動車でも通えばいいんですが」
鉄砲水——飯田市内を流れる

野底川の氾濫もそうだった。松川と合流する寸前に、この川はあふれ、東中央通りの商店街へ走った。道が大きい流れになった。直径二メートルある大石も、ごろごろと商店街へ流れこんだのである。



天竜川がなだれこんだドロ渦の川路(飯田市)

「野底川の橋を「永久橋」にしたのが悪かったんだ」
市沢速雄さん(43)は屋根まで埋まった家を見やりながら、投げつけるように言う。堅固な橋にしたために、流れる伐採材がみんなたまってしまった。その橋から上流はダムになって、はけ口を求めようとして逆流したのである。

「橋は適当に流れてもらいたいニ」
と彼は言う。新しい流れを開いておどろかせる濁水は見るも恐ろしい。
——伊勢湾台風被害も人々をふるえあがらせたが、そのほとんどは「浸水」だった。だが、伊那谷は「水害」ではな

滅びた大桑園

だが、乱伐——鉄砲水というかと以外に原因はないか。

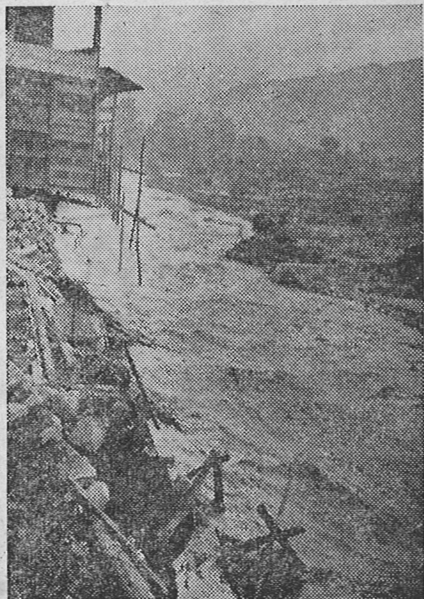
と、地区の対策本部では言っているが、飯田市側の道はズタズタに切れ、救援物資の輸送もおぼつかないのだ。
「ここは日本三大桑園の一つと言われた産地でしたに」
と、老人は目をしばだたかせ一瞥、それは沼地になって

ダムで川底が上ったんだ

「なにかもダムのせいだ」
と彼は天竜をにらんで言った。ダム——この地区の人たちはドロにまみれた手をゆるめると、この言葉を口にすると、
せまい天竜峡を南にして、天竜川はちょうどじょうごの形で流れている。つまり、水は川路の沿岸に滔々と集まるわけである。

「もうかるからちゅうて、濫伐したからだ」
と言う、市沢さんの声には、真実がある。
い。むしろ、「泥害」とも言うか、ぬかるみのような泥、そして岩石をもなった土砂の襲撃である。しかも、そこにおびただしい材木がとも走るのだ。これらは山国の特徴とは言え、
「もうかるからちゅうて、濫伐したからだ」
と言う、市沢さんの声には、真実がある。
「桑の中から小唄がもれる、小唄聞きたや顔みたや」
その老人は泣きながら、伊那節の文句を引用して、どんなに良質で広い桑園だったかを聞かせてくれた。だが、それも今はない。
ら生まれたのだとも言えるだろう。
だが、たしかにダムが一つの原因を作っている。天竜峡の下に泰阜ダムがあるために、上流に土砂が堆積し、河床は年々上がるばかりなのだ。
「天竜は高くなった。昔は死人岩というのがありまして、そこからのぞくと、遥か下のほうを水が流れていましただ」

今年、飯田市に合併したばかりの川路は、災害地域の最南端にあり、天竜峡に接している。この部落は三分の一が泥のなかに沈んでしまった。
ここは天竜の本流に接している。三十日、ようやく水のひいた川路に足を踏み入れると、泥からわずかに屋根を出している家々が、崩れ傾いて並んでいる。
飯田線川路駅は見るかげもなく、鉄路はまったく土のなかに消えている。あちこちでは、せめて家のなかにおいてあった家財を掘り出そうと、シャベルを握って汗みどろである。
「何も出せなかった。ここは本流のそばだから、毎年のように被害を受けているが、今年のように水の増えるのが早かったのは初めてだ」



土台を流されて傾いた民家(野底川)

と、山崎武志さん(51)は呆然としながらも、やはりシャベルを動かす。
こちらの小川では、何十人も主婦たちが、掘り出されたタンスやナベなどを一心に洗っている。
支所、農協、学校、郵便局な

ど、全部が濁流に洗われたのである。天竜の沿岸に植えられていた桑園もわずかに頭だけ出している。堆積した沼のようなドロには犬や猫の死体がまなまましい。
「みんな着のみ着のまま。肌着一枚でも欲しい」

と、ある老婆は言う。それが今では川路駅と同じくらいの高さである。底が浅くなったためにこの地方は毎年被害を受ける。「もう移住するより道はないねえ」

真つ赤に血走った眼で、もう三日間寝ていないという牧内貞一さん(53)はつぶやいた。牧内さんが開いていた店は骨だけで全壊にひたしている。

だが、そんな持ってゆきようのない諦めの言葉からすぐに、「ダム」が眼の前に浮かぶらしい。

「ここまでは絶対に被害はないと中部電力では言ってるが、昭和三十年から四十年も川は高くなっているんだ」と怒りの表情は消えない。昔は大きい岩が天竜から拾えたそうだが、今では深い土砂に沈んで石ころさえ表面に出ない、という。

同じ部落の牧内かつみさん(59)は、流れる涙をふきふき語る。

「昭和二十年に床下五寸の水がついたことがあります。今までの最高でした。ところが、今度ばかりは、二階に荷物をあげて下へ降りようとすると、そのたびに一段ずつドロが来ました。このあたりは養蚕するゾラ。」

大きい家ばかりだ。それがみんな壊されちまって……。ダムのせいにしないです。何回も陳情しに行っても相手にしてくれない。

水がツいでるときに見に来てくれ、と言っているが、電力の人はこんなときは来ない。わたしたちやお金持になりたいとは思いません。ただ、安心して生きていきたい。

荒ナワ巻きの棺桶

雨があがつて、やつと市内に給水の見込みがつき、電気もついていた。市内のプールを消毒して給水するという騒ぎだ。飯田農業高校や丸山小学校など、被災者の避難所を案内してくれた行きずりの人は言った。

「今日、やつと横になれませよ。これまで四日間は、乾いたズボンをはいたことがありませんでした。長靴を脱ぐひまもないもんで、砂が入って、足はささらのようになっています。まじりました」

市内を自衛隊や、防疫対策本部などの車が行きかう。伊賀良では集団赤痢が発生している。「自衛隊の活躍は本当にありがたかった」

これは伊那谷の一人一人が言っている。ある運転手は、

きてゆきたいと思うだけで、よ。水の来るたびに……。この悲しみはわかってもらえないだ。お婆さんはとうとう声をあげて泣き出した。

「お金はいらぬからダムを取って、川をどんどん低らしてもいい。それだけでいい」

その言葉を周囲の人はみんなうなだれて聞いていた。

「わたしは社会党支持なんです。がね、今度は眼のあたりになりがたを見せつけられました。毎年のことなんだから、いっそ「国土開発隊」専門にしたらどうですかねえ」

——だが、落ちつきを取りもしはじめた飯田市をよそに、下伊那郡大鹿村の惨事にはただ呆然とするばかりだった。二十九日に起こった山くずれで、外部から孤立したままなのだ。

そこは天竜の支流、小渋川の上流で、県道松川線に約二十キロの奥地にあり、ヘリコプターが唯一の連絡機関。桶谷に出たところから、道は小渋川に接するようになる。ところが、ここから先は道をたどることが不可能になる。上から流れ落ちた土砂と、岸をえぐって

奔流する小渋川とで、落合まで約三キロの道はかげも形もなくなっているのだ。そこで森林のなかに踏み込む。

その三キロを二時間くらいかけて、飯田を出発してから十二時間、はつとするような展望が開けた。

小渋川の左右、大西山の川に面したガケが高さ約二百、幅約三百にわたってなだれ落ちているのだ。その崩れた痕の茶色の地肌がなまなましい。

川のなかには小さい山ができてあり、一部落全滅という惨状は、全国でもっともひどい。

そこへ降り立ったとき、ふと映画『用心棒』を思い出した。

にわかづくりの棺桶が間に合わないのだ。リソング箱用の荒板を形だけ桶のように作り、荒ナワを二度ぐるぐる巻きにする。

それが追いつけないほどつぎつぎに死体が掘り出される。一家そろって掘り出されることもあ

るといふ。

川のなかに小山ができたために、小渋川はそれをよけて彎曲して流れる。河原は膝までつかるドロ。あたり一面に腐臭が立ちこめている。

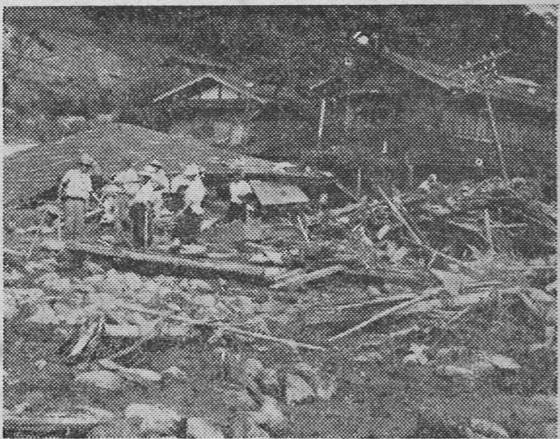
村人が飼っていたブタがあたりをうろついている。これが死体を食べることもあるそうだ。ここには混乱があるだけだ。

「ただ、せきたてられるような気持です」

と主婦はドロに汚れた肌着を洗濯しながら語った。



「もう行くところもない」としづむ さん一家



どこから手をつければいいのか……それでも立ちあがる農民(大鹿村大河原)

「豪雨が来たときは逃げ場がありませんでした。どちらを向いても、どの山も地割れがしているんだ。かくれようとしても

むんたちの共通のものになってくる。

「何度も注意報を出したんですがねえ。みんな気象台に注目し

てくれなかった」

長野地方気象台はこう言っている。だが、伊那の山は風化浸蝕でもろい土質なので、山の荒廃率も全国平均より八割も高いとい

死の谷をよみがえらす力は

七十歳になるある老人は、今年度の水害の恐ろしきは二百五十年來のものだと言っていた。

「羊満水と言いました。江戸時代に大洪水が伊那谷をメチャメチャにした。それ以来のものですよ」

この話はいつの間にか伊那谷に拡がったらしい。誰もが「二百五十年來」の恐怖を語るの

死者、行方不明あわせて百九十八人(二日現在)という伊那谷

う。

四百ミリの降雨で地割れを生ずるといふのに、今度は五百七十八ミリも記録した。支流はたちまちドロ水の洪水となったわけである。

の被害は全国でも最高だが、飯田市の置かれた下伊那災害対策本部では、

「どうしようもない悲劇だ。集中豪雨が最大原因。責任はどこに持つてゆきようもない」と言う。それと同じように、「県政をストップさせてでも災害復旧に全力をあげる」と言明した西沢知事は、「復旧費を、移住費にしてもいいのではないか」という提案もしているという。

そうかもしれない。逃げ場を見つけたほうが良策かも知れない。

だが、大鹿村大河原の現場の、埋もれたかぼちゃの葉にさわりの顔で七十一歳になる老人が言った言葉は忘れられない。

「この村は伊那谷でも平和郷で知られておりました。その昔、護良親王の弟、宗良親王がこの村に住みつかれたのです。信濃の宮様」と言われて、そのおつきの者たちがこの村を切り開きました。

この土地、この土はわしらの祖先が戦いどつてきたものなのです」

その眼は現在の不安と不屈の闘志とで混然としているようだった。果たして、伊那の七谷は死の谷なのだろうか――。